

非常時に備えた多様性のある精神看護学実習の検討 ～新型コロナウイルス感染症の影響を受けた 2020年度精神看護学実習の実際と課題～

藤木真由美 川内健三 栗原淳子 風間眞理
(Mayumi FUJIKI, Kenzo KAWAUCHI, Junko KURIHARA, Mari KAZAMA)

【要約】

《目的》2020年度の精神看護学実習を振り返り、代替実習における課題を明らかにし、臨地実習が困難な非常時に備えた多様性のある精神看護学実習を検討する。

《方法》代替実習内容は、コミュニケーション動画、紙上事例の看護過程の展開、実力確認テスト、社会復帰施設の調べ学習、家族体験談レポートを行った。臨地では病院見学、社会復帰施設3日間を行った。精神看護学領域の教員間で、代替実習内容を実習目標と学習目標および学習目標の細項目に齟齬がないように調整した。

《結果》学習目標到達度は、2019年度と2020年度において割合は異なるが、2020年度においても一定の学びがあった。学習目標1、2では、2019年度の方が目標到達度は高く、学習目標3、4では2020年度の方が高かった。

《結論》

1. 2020年度の代替実習は一定の学びはあった。
2. 教育方法における課題は、治療的な対人関係への発展に向けた指導と、アセスメント力と看護技術の修得に向けた指導であった。
3. 非常時においても学習目標に沿った学びができるよう、臨地実習の受け入れ状況に応じて、効果のあった学習方法を活用することが重要である。

キーワード：精神看護学実習、代替実習、教育方法、多様性、新型コロナウイルス感染症

I. はじめに

2013年から精神疾患は、がん・脳卒中・急性心筋梗塞・糖尿病の4大疾患に加わり5大疾患の1つになった。この5大疾患は、患者数や死亡数が多いことや緊急性が高いなど一定の条件を満たす厚生労働省が重点的に取り組むべきと指定した疾患である。精神疾患の総患者数は年々増加し、2020年度患者調査¹⁾において、入院患者数23.6万人、外来患者数26.6万人となっており、糖尿病、がん、脳卒中、急性心筋梗塞の5大疾患の中で最も多い状況であった。このことから、これまで以上に精神疾患を持つ人々に対して質の高い看

護を提供することが求められている。

看護学生にとって実習は、学内での講義や演習で学習した知識・技術の統合を図り、看護方法の習得や看護観を深める重要な科目である。精神障害を持つ当事者は、精神障害によりこれまでできていたことができなくなったり、他者とコミュニケーションがとりにくくなったりすることで孤独感や自己肯定感が低くなることや、幻聴や妄想といった症状を周囲に理解してもらえないことで生きづらさを抱えている。精神看護学実習では、学生は当事者とのかかわりを通して当事者の抱えている生きづらさに触れる機会となる。そして、当事者のリカバリーしていく過程を知り、自己決

ふじきまゆみ : 目白大学看護学部看護学科
かわうちけんぞう : 東京家政大学健康科学部看護学科
くりはらじゅんこ : 目白大学看護学部看護学科
かざまり : 目白大学看護学部看護学科

定を支える援助について学習する場になっている。援助においては、プロセスレコードを用いて対象者と自己の相互作用を分析すること、自己の傾向や偏見のあった自身に気づくことを通して治療的な対人関係を学び、また、入院から地域移行に向けた多職種連携なども学習する。

新型コロナウイルス感染症の収束が見えない中、全国的に看護教育方法の変更が余儀なくされ、本学の精神看護学実習においても同様に施設からの実習受け入れ中止の連絡があった。日本看護学系大学協議会の報告によると、2020年4～7月の領域実習において、計画通りに実施できたのはわずか1.9%で74.1%が学内実習に変更していた²⁾。2020年9月以降の実習において、代替実習を行っても達成が困難であった到達目標について、達成が困難な到達目標があったとの回答は50.7%で達成が困難な到達項目がなかったのは42.2%であった³⁾。

実習受け入れ中止に伴い、臨地実習を学内・遠隔実習に置き換え、社会復帰施設はこれまで2日間だったところを3日間にした。概ね社会復帰施設の実習は行うことができた。しかし、臨床実習の中止に伴って実習目標を達成するように工夫をしたが限界もみられた。

今後は、新型コロナウイルスの感染状況による実習施設からの急な受け入れ中止や実習生や指導教員の感染を含めた非常時による臨地での実習が困難な場合に備えて実習方法の代案を準備することが求められる。最近では、精神看護学実習における新型コロナウイルス感染症による対応を示した報告も散見し始めるようになった^{4,5,6)}。そこで、2019年度と2020年度の学習目標到達度を比較して、代替実習における課題を明らかにし、臨地実習が困難な非常時に備えた多様性のある精神看護学実習を検討することを目的とした。

II. 2019年度の精神看護学実習の概要（新型コロナウイルスの感染拡大前）

1. 精神看護学のねらい

ライフサイクルのあらゆる段階にある人々に対して、精神の健康の保持・増進、および回復への援助を行うための知識と基礎的技術を修得する。

2. 精神看護学実習のねらい

精神科医療が病院中心の医療から地域生活を支える

医療へと転換しているなかで、病院から地域生活へとつなげていくための継続した看護が求められる。本実習では、病院での看護実践を通して治療的介入や援助を学ぶとともに、社会復帰施設での実習体験を含めて、多職種連携と看護師の役割、対象者を取り巻く社会的環境のあり方や人権について学ぶことをねらいとする。

3. 精神看護学実習の学習目的

精神保健福祉における看護の役割を理解し、精神に障害をもつ対象者とその家族に対して、精神の健康回復への看護援助に必要な実践能力を修得する。

4. 精神看護学実習の学習目標

- 1) 対象者との対人関係の発展過程を理解し、治療的関わり方の技法を学ぶ。
- 2) 精神に障害を持つ対象の、急性期、回復期、慢性期の特徴を理解し、精神の健康回復のために必要な援助を行うことができる。
- 3) 精神保健福祉における看護の役割・機能を学ぶ。
- 4) 精神障害者の人権について理解し、実践を通して倫理観を培う。

III. 新型コロナウイルス感染症の影響を受けた後の精神看護学実習の実際

1. 実習スケジュールの大幅な変更

各領域の実習において病院や施設から相次いで実習受け入れの中止の連絡があり、学科内においても感染対策の検討などから、春学期はすべての領域実習が学内実習に変更された。精神看護学実習においては、2週間の実習を春学期に1週間、秋学期に1週間に分けて実施することになった（表1）。

2. 学習目標到達に向けた実習構成の変更経緯と考え方

変更直後は早急な判断が求められた時期であった。そのため、まずは精神看護学領域の教員間で実習において学生に学習してほしい内容や領域で重きを置く内容について検討をした。その結果、以下の8点について教員間で精神看護学実習の考え方の共有を図った。

- ①精神障害者と接した経験のある学生は少ないため、精神障害による生活への影響、生きづらさや、回復する過程のイメージをより持てるようにする。

表1 実習スケジュール

2020年度の実習スケジュール

| | 1日目 | 2日目 | 3日目 | 4日目 | 5日目 |
|-----|------|--------|--------|--------|-----|
| 春学期 | 遠隔 | 遠隔 | 遠隔 | 遠隔 | 遠隔 |
| 秋学期 | 病院見学 | 社会復帰施設 | 社会復帰施設 | 社会復帰施設 | 学内 |

2019年度以前の実習スケジュール

| | 1日目 | 2日目 | 3日目 | 4日目 | 5日目 |
|-----|-----|--------|--------|-----|-----|
| 1週目 | 病院 | 病院 | 学内 | 病院 | 病院 |
| 2週目 | 病院 | 社会復帰施設 | 社会復帰施設 | 病院 | 学内 |

- ②秋の実習に備えた知識、技術の準備ができるようにする。
- ③新型コロナウイルス感染症の影響で、交流が少なくなった学生に交流の持てる場を設ける。
- ④授業開始から各領域の実習に休みがないこと、慣れない遠隔実習による負担などから、心身ともに健康を維持できるような配慮をする。
- ⑤秋学期に病院実習で患者を受け持つことはできない可能性が高いため春学期に事例で看護過程を学習する。
- ⑥教員は2名体制であったことから、どちらかが体調不良になっても実習に支障がないようにスケジュールを構築する。
- ⑦学習目標と実習内容と評価にずれがないようにする。
- ⑧学習環境の差があることを考慮する。

3. 学習目標に応じた実習方法の見直し

1) 2020年度における実習方法の変更点

2019年度と2020年度の学習目標に対する実習方法の概要は表2のとおりである。

2) 2020年度の実習方法を変更した経緯

学習目標1で変更した経緯は、社会復帰施設実習では学生を2、3名で配置することから教員不在の環境下による実習の可能性が高い。そのため、学生が利用者とのかかわりで困難に陥りそうな場面や対象理解やかかわり方のイメージを持ってもらう必要があった。具体的には、精神看護方法演習で精神症状のある患者目線の動画視聴を取り入れた。この動画視聴により、精神症状が生活や人との交流への影響や精神症状のある人の関わり方が理解できるようにした。春学期の遠隔実習では、精神症状のある人のコミュニケーション

動画を取り入れ、段階を踏んでコミュニケーションを図ることを学生がイメージできるようにした。また、病院見学実習を通して、看護師から患者とのかかわりに関するエピソードの語りや、施設スタッフと利用者の場面から治療の人間関係の過程を学ぶようにした。

学習目標2の変更した経緯は、病院での実習であれば、同じ疾患でも回復の段階が異なり、個別性を踏まえかかわりを考える機会になるが、事例展開では、個別性を出しにくい。そのため、グループワークにすることで、精神障害者のイメージや、視点、援助を具体的に検討できると考えた。グループワークを行う際には、全体像をグループメンバーが個々でとらえさせて、人任せにならないように工夫した。秋学期の実習では、精神科病院における安全管理や特殊性、精神障害のある方の急性期・回復期・慢性期の特徴やストレス・リカバリーに向けた援助の実際、精神科に特化する治療が理解できるように実習指導者と調整を図った。

学習目標3を変更した経緯は、2年生秋学期開講の精神看護方法論では社会復帰施設の役割を講義し、3年生春学期開講の精神看護方法演習では社会復帰施設の施設長を外部講師として招き、地域における看護師の役割について講義を行った。しかし、受動的な講義であるため、学生が具体的に理解でき関心を持てるようにする必要があった。そこで、自分の地域の社会復帰施設を調べる課題を出した。その課題から社会復帰施設への関心を持つようにすることで、秋学期の施設実習のイメージができ、調べた施設との比較を行うことから疑問も生じ学びが深まると考えた。

学習目標4を変更した経緯は、社会復帰施設の利用者は、社会生活を営んでいることから精神症状が比較的安定しているため、精神障害者の人権や社会問題、

表2 学習目標ごとの学習方法

| | 2019年度の実習方法 | 2020年度の実習方法 |
|--------|--|---|
| 学習目標 1 | 病院実習 6 日間の中で一人の患者を受け持ち、日々のかかわりの中で気がかりな場面をプロセスでコードに記述し、自己の感情や行動特性に気付く。また、治療的対人関係を発展させていくことで、援助者も自己洞察ができることを理解し、看護観を深める。 | 春学期 ・遠隔実習で、コミュニケーション動画を視聴。さらにディスカッションを通して多角的にとられることをねらう。 秋学期 ・社会復帰施設実習で、利用者とのコミュニケーション場面をプロセスレコードに記述し、自己の感情や行動特性に気付くことを着地点とした。 ・病院見学実習を通して、看護師の患者とのかかわりに関するエピソードの語りや、施設スタッフと利用者の場面から治療的人間関係の過程を学ぶ。 |
| 学習目標 2 | 病院実習で受け持ち患者を受け持つ。代表疾患である統合失調症、双極性障害を診断されている患者を受け持ち、看護過程の展開を実施。 | 春学期 ・方法演習時にアセスメントまで取り組んだ事例を個人で全体像を作成する。 ・グループワークで、看護計画、実施、評価を実施する。 ・事例は、代表疾患である統合失調症、双極性障害。 秋学期 ・病院見学と臨床講義で以下の内容を実習指導者が説明する。 ・精神科病院における安全管理や特殊性について。 ・精神障害のある方の急性期、回復期、慢性期の特徴やストレス・リカバリーに向けた援助の実際。 ・精神科に特化する治療について。 |
| 学習目標 3 | 社会復帰施設実習 2 日間。 主に、就労継続支援 B 型、地域生活支援センターで、プログラムや作業に参加する。 | 春学期 ・自分の地域の社会復帰施設の調べ学習。 秋学期 ・社会復帰施設実習 3 日間。施設は2019年度と同じ施設。 |
| 学習目標 4 | 2 週間の実習を通して学習する。 | 春学期 ・家族体験談を読む。 秋学期 ・最終カンファレンスで学びを深める。 ・2 週間の実習を通して学習する。 |

看護の課題を見出すにはより具体的な事例が必要であると判断した。そこで、平易な言葉でかつリアリティのある事例として体験談から学ぶことが効果的と考え、当事者や家族の置かれている状況および地域精神保健福祉の問題や看護の課題について触れている、家族体験談（兄弟姉妹の会編：精神障害のきょうだいがいます）の本の一部を抜粋し活用した。

3) 学習目標の見直し

学習目標に沿った学習ができるように調整を図れば、代替えの実習方法で学習目標の内容が補えると判断した。しかし、学習目標 2 の細項目においては齟齬があるため、グループワークで行う部分について実習内容とずれが生じないように変更した。例えば、「個別性を踏まえて具体的な目標の設定ができる。」であれば「グループで、個別性を踏まえて具体的な目標の設定ができる。」のように変更した。

4. 実習概要

1) 春学期実習の概要

すべて Zoom を用いた遠隔実習とし、1 クールに18

名～26名の学生を2、3グループ、課題によっては4～6グループに分けて実施した（表3）。

2) 春学期実習の実際

学生にとっても初めての遠隔実習であったため、学生が慣れている授業の時間帯に合わせて休憩をとることや PC 画面を1日中見続けることがないように考慮した。

(1) オリエンテーション

秋学期の実習が確定しない中で、実習目的、目標、学習目標で到達度の変更点や春と秋学期のそれぞれの実習で学習することを説明した。

(2) コミュニケーション動画の視聴

動画は、1～3分程度で、「ほめる」、「意見を言う」、「幻覚妄想」などをテーマにした親子のコミュニケーションで、ありがちな場面と望ましいやり取りを Zoom で画面共有し、視聴後にその都度ディスカッションを実施した。さらに学んだことを Webcom で提出とした。

(3) 関連図作成

受け持ち事例患者への看護展開、及びグループワー

表3 春学期実習スケジュール

1日目

| | 1限 | 2限 | 3限 | 4限 |
|-------|-----------|-------------|-------------|-------------|
| グループ1 | オリエンテーション | コミュニケーション動画 | 関連図作成(個人) | 関連図作成(個人) |
| グループ2 | | 関連図作成(個人) | コミュニケーション動画 | 関連図作成(個人) |
| グループ3 | | 関連図作成(個人) | 関連図作成(個人) | コミュニケーション動画 |

2日目

| | 1限 | 2限 | 3限 | 4限 |
|-------|------|-----------|-----------|-----------|
| グループ1 | 実力確認 | 関連図発表(個人) | 実力確認見直し | 実力確認見直し |
| グループ2 | | 実力確認見直し | 関連図発表(個人) | 実力確認見直し |
| グループ3 | | 実力確認見直し | 実力確認見直し | 関連図発表(個人) |

3日目

| 3日目 | 1限 | 2限 | 3限 | 4限 |
|-------|---------------------------------|----|--------------|---------------|
| グループ1 | ケアプラン実施のための話し合い(グループを6グループに分ける) | | ケアプラン発表と意見交換 | ケアプラン実施のための準備 |
| グループ2 | | | | |
| グループ3 | | | | |

4日目

| | 1限 | 2限 | 3限 | 4限 |
|-------|-----------------------|-------------------|----|----|
| グループ1 | ケアプラン実施と評価 (グループ毎) | 自分の地域の社会復帰施設個人ワーク | | |
| グループ2 | | | | |
| グループ3 | | | | |

5日目

| 5日目 | 1限 | 2限 | 3限 | 4限 |
|-------|----------|----------|----------|-----------|
| グループ1 | 施設の発表 | 家族体験談の感想 | 家族体験談の感想 | まとめレポート作成 |
| グループ2 | 家族体験談の感想 | 施設の発表 | 家族体験談の感想 | |
| グループ3 | 家族体験談の感想 | 家族体験談の感想 | 施設の発表 | |

クで意見交換ができるように個人で事例を想起し関連図を作成するように指導した。事例は、精神疾患の代表的な疾患である統合失調症と双極性障害である。

(4) 実力確認

実力確認問題を Webcom から提示し、解答は Google フォームを用いた。内容は、精神看護学で重要かつ国家試験に出題されやすい問題とした。誤り部分については、解き直したものを Webcom で提出することで知識の定着につなげた。

(5) ケアプラン実施

1グループを4名前後で設定した。ケアプランは優先度の高い看護診断を1つ計画することにした。相談はメール、Webcom の質問、実習用携帯、Zoom のい

ずれかで受け付け、各グループから途中経過の報告を Zoom で行った。ケアプラン発表は、Zoom で画面共有し、内容の意見交換後、修正をするようにした。ケアプランの実施発表では、グループ内で看護学生役、患者役など担当を決め、場面は、主に看護師と患者のコミュニケーション場面とした。発表時間は10分(発表+意見交換)程度として、発表後にケアプランの修正を行い、Webcom に提出とした。

(6) 自分の地域の社会復帰施設紹介

インターネットで、自分の住んでいる地域にある精神に関連のある社会復帰施設を調べる課題をだした。施設紹介にあたって、地域の特徴や地域にある施設数、紹介する施設の特徴をまとめ、Webcom から提

出し、発表は Zoom で行った。発表時間 1 人10分（発表 5 分＋質疑応答 5 分）程度とした。なお、調べ学習において、施設によって HP を持っていない場合や、HP の内容においても差があったことから、作成過程での相談はメール、Webcom の質問、実習用携帯、Zoom のいずれかで受け付けた。

(7) 家族体験談

Webcom にアップロードされた家族体験談の内容を読んで感想文を Webcom から提出するようにした。

(8) まとめレポート

秋学期の学習が深まるよう、実習を評価表に沿って春学期 1 週間を振り返り、秋学期の臨地実習にむけて取り組む課題をまとめ、Webcom から提出するようにした。

3) 秋学期実習の概要

病院見学実習では受け入れ人数の上限があり、1 タールの学生を 2 グループに分けて実施した。社会復帰施設は 2～3 名で配置し、最終日は Zoom でまとめを行った。

4) 秋学期実習の実際

(1) 病院見学

本実習では 3 つの病院を使用して実習を行っている。A 病院からは実習受け入れ中止となり、配置予定の学生を B 行院に配置した。B と C 病院は時間短縮をすることで実習が可能となった。B 病院は昼食を院内でしないことを条件に実習時間は 2 時間 30 分、C 病院では、実習時間を 4 時間 30 分と実施可能であっても、受け入れ条件が異なっていた。

病院見学実習の目標は、①精神科病院における安全管理の特殊性を学ぶ。②精神科病棟の看護の特徴を理解できる。③精神科での治療、プログラムを知ることが出来るとした。実習目標を達成するために見学実習前には、指導者へ質問する内容を考える課題を提示した。

(2) 社会復帰施設

社会復帰施設実習は、主に就労継続支援 B 型や地域活動支援センター、相談支援事業所で行った。学生は 1～3 名に分かれて、3 日間で 1 つないし 2 つの施設で実習を行った。社会復帰施設での実習においては、本来は教員が毎日巡回して指導をする。しかし、病院見学実習に教員 2 名が引率したことから巡回指導ができない日があった。そのため、直接的な指導ができない日はメールもしくは電話で指導をした。社会復

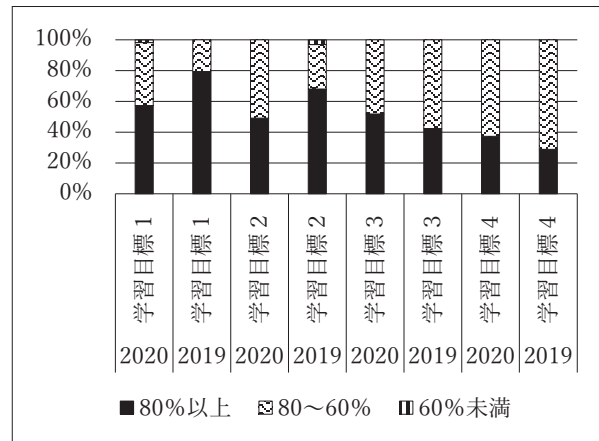


図 1 2020年度2019年度における学習目標到達度

帰施設では、感染対策の一環で利用者の人数を制限した施設があった。そのため、Zoom を利用して、施設に通所した利用者と話したり当事者が作製した幻聴妄想かるた（新澤克憲＋就労継続支援 B 型事業所ハーモニー：超・幻聴妄想かるた）を行うなど工夫した。

(3) 学内

Zoom を利用して、見学実習、社会復帰施設での学びの共有、プロセスレコードのカンファレンスを、記録の整理の時間とした。プロセスレコードで学んだことを実践に活かすという点では、今回はプロセスレコードのカンファレンスが実習最終日に行っていることから、他の領域で活かす形となった。

5) 2020年度の学習目標到達度

到達度は、学習目標 1 は治療的人間関係、学習目標 2 は、看護の展開、学習目標 3 は、地域、学習目標 4 は倫理・人権の 4 つの視点でとらえている。

2019年度と2020年度では実習方法、評価方法が異なり、また評価する教員も異なることから一概に比較はできない。しかし、学習目標は変更せず、実習内容、方法に応じて評価の重みづけも変更した中で、どの程度の学びの違いがあったか参考として評価値を単純集計した。学習目標に対して点数配分を変更していることから、得点平均ではなく、それぞれの目標到達割合を示す（図 1）。2019年度と2020年度において、到達割合は異なるが、2020年度においても一定の学びがあり、学習目標 1、2 では、2019年度の方が目標到達度は高く、学習目標 3、4 では2020年度の方が高かった。

IV. 考察

1) 学習目標1の到達度

プロセスレコード活用の効果に、自分のかかわり上の傾向や問題を明らかにできることや状況を考え具体的に理解すること、かかわり方の技法を積み重ねて習得ができるなどがある⁷⁾。2020年度の実習では、「ほめる」、「意見を言う」、「幻覚妄想」などをテーマにしたコミュニケーション動画学習によって、社会復帰施設利用者とのかかわりに活用できるスキルを学び、社会復帰施設実習の利用者に対して実践した。困った場面についてプロセスレコードを用いたことで自己洞察をする機会をもてることになり、一定の学びにつながったと考えられ、精神看護学実習の代替実習となることが確認できた。しかし、利用者とはその日限りのかかわりのことが多く、治療的な対人関係への発展が学びにくい状況で、関係性が変化することの理解までは及ばなかったことが課題となった。

2) 学習目標2の到達度

看護過程の展開にかける日数が実習2日間分であったため、全体像をとらえることを個人で行い、援助においてはグループ学習にしたことで、学生は視野を広げることができていた。さらに、その学びを基に秋の病院見学実習において指導者へ具体的な質問をすることにつながり、一定の学びとなったと考えられる。2020年度においては利用者とはその日限りのかかわりのことが多く、治療的な対人関係への発展が学びにくい状況で、関係性が変化することの理解までは及ばなかったことが課題となった。日本看護系大学協議会の報告によると、臨地での実習短縮・中止に伴い、実習内容・方法の変更の到達状況について知識、態度においては実習方法の変更前と同程度と回答が最も多く、技術においては、代替方法の方がやや下回ったという回答が最も多かった⁸⁾。

看護過程の展開のアセスメントの部分は知識が問われるところであり、本学においても到達状況は同程度であったが、技術においては、グループで取り組み遠隔で行ったことから学生個々の技術を評価するまでに至らなかったことが課題となった。

3) 学習目標3の到達度

社会復帰施設の利用者は、症状が安定しており、人との交流も比較的取れ、実習学生の受け入れに慣れている利用者も多くいる。その利用者から、趣味や生活

の様子や通所の目的、以前入院していたころの看護師についてなど様々な話を聴ける。このような体験は、2020年度に限ったことではないが、2020年度の方が目標到達度は高かったのは、施設実習を3日間にしたことや実習前に自分の地域にある施設の調べ学習の取り組み、学生の意欲によるものと考えられる。

施設の調べ学習をしたことで、学生は近所に社会復帰施設があることを知り、これまで知らずに利用していたことに気が付いた。学生は社会復帰施設を自分の身近にとらえることができたことで関心が高まり、地域で暮らす障害者の様子や地域における連携を学ぶことができていたと考えられる。

そして、2020年度の臨地実習はどの領域においても実習施設からの受け入れ中止があり、代替実習を行っていたことから、学生が直接患者や利用者とかかわれる機会は非常に限られていた。そのため、利用者とかかわり、看護を学ぶ機会があることで主体的に学習していたことが考えられた。

4) 学習目標4の到達度

小塩ら⁹⁾によると、スティグマ軽減戦略として、「精神疾患を持つ人と会って話す機会を持つ」という経験が最も効果大きいことが明らかにされているが、精神疾患について知ること、スティグマ軽減に有効とある。社会復帰施設の利用者の多くは統合失調症者の長期在宅生活者が多いことから、精神障害者の抱える偏見や入院経験の話を聴ける機会や、施設で相談業務などの実際を知ることから、人権擁護や社会問題を考えることができたと考えられる。このような経験は2020年度に限ったことではないが、2020年度の方が目標到達度は高かったのは、病院見学実習への印象と家族体験談の学びによる影響と考える。

病院見学実習では、2020年に限らず鍵のかかった閉鎖病棟や保護室の見学をしている。急性期の看護について看護師から、精神症状の悪化のために隔離や身体的拘束で患者の行動の制限が必要とされる場合に、患者の人権に配慮しつつ病状に応じて最も制限の少ない方法で行っていること、そのため、安全と尊重の相反するケースに対して多職種による行動制限最少化のカンファレンスを日々行っていることなどの説明がある。このことから患者の人権擁護を考えることにつながったと考えられる。2019年度は患者とかかわる日数が多いことで実体験である患者とのかかわりの印象が強く、2020年は病棟見学のみだったため、人権擁護に

関する印象が強くなったことが影響したと考えられる。

2019年度までは、受け持ち患者の全体像をとらえるときに家族関係の視点がない学生がいた。しかし2020年度においては、家族体験談の学びをしたことで、家族が精神疾患になったことの受け止め、症状に振り回されて疲労困憊する、親亡き後の将来への不安などの家族の葛藤や苦悩などを理解し、地域精神保健福祉の問題や看護の課題について考える機会となったことも学習到達度が高くなったことに影響していると考えられる。

5) 非常時に備えた多様性のある精神看護学実習

非常時に備えた多様性のある精神看護学実習として以下の2点が考えられた。1点目は、治療的な対人関係への発展にむけて、治療的な対人関係の変化は、経験して実感できることであるが、視聴覚教材や実習指導者、教員の看護経験を伝え理解を深められるような臨床講義の時間を設ける。2点目のアセスメント・技術の強化においては、学内で事例展開を行う際には、日々変化する患者の状態の情報と加えること、看護過程を一通り実施する場合には日数を確保すること、そして実践場面として最初の出会いの部分や、基本的な技術として検温の場面、精神症状のある時のかかわりなどの場面を設定して、学内実習を行う。その都度アセスメントをしてかかわる看護の在り方を学べるようにする。

非常時においても学習目標に沿った学びができるように、臨地実習の受け入れ状況に応じて、看護過程の展開の日数とのバランスを考慮しながら、学習到達に良い影響があったコミュニケーション動画視聴、実力確認、自分の地域の社会復帰施設紹介、家族体験談からの学習を活用することが重要と考えられる。

V. 結論

1. 2020年度の新型コロナウイルス感染症による実習方法の急な変更であったが、2019年度と2020年度において、到達割合は異なるが、2020年度においても一定の学びはあった。
2. 教育方法においての課題は、治療的な対人関係への発展に向けた指導と、アセスメント力と看護技術

の修得に向けた指導であった。

3. 非常時においても学習目標に沿った学びができるように、臨地実習の受け入れ状況に応じて看護過程の展開の日数とのバランスを考慮しながら、学習到達に良い影響があったコミュニケーション動画視聴、実力確認、自分の地域の社会復帰施設紹介、家族体験談からの学習を活用することが重要と考えられる。

利益相反

開示すべき利益相反状態はない。

【文献】

- 1) 厚生労働省：令和2年（2020）患者調査の概況。
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/20/dl/suieikanjya.pdf>（閲覧日2022年9月19日）
- 2) 日本看護系大学協議会：2020年度看護系大学4年の臨地実習科目（必修）の実施状況調査結果報告書。
<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/09/202009koutoukyouiku-houkokusyo.pdf>（閲覧日2022年9月19日）
- 3) 日本看護系大学協議会：2020年度 COVID-19に伴う看護学実習への影響調査【調査B】2020年度 COVID-19に伴う看護学実習への影響調査結果，72（科目別）
https://www.mext.go.jp/content/20200302-mxt_igaku-000013087_6-2.pdf（閲覧日：2022年9月19日）
- 4) 平山裕子，辻脇邦彦，山口恵，高井久美，鈴木美幸：ニューノーマル時代を見据えた精神看護学実習～2020年度精神看護学における遠隔教育による臨地実習の現状と課題～．東都大学紀要11（1），125-135（2021）
- 5) 鈴木祐子，井上聡子：新型コロナウイルスの影響による精神看護学実習のあり方．精神科看護337，62-67（2020）
- 6) 近藤美保，遠藤りら，長澤利枝，篁宗一：オンラインで行う精神看護学実習の事例検討による効果評価．精神科看護348，62-70（2021）
- 7) 長谷川雅美：自己理解・対象理解を深めるプロセスレコード.24，日創研出版（2019）
- 8) 3）同掲書（閲覧日2022年9月19日）
- 9) 小塩靖崇，山口創生，太田和佐，安藤俊太郎，小池進介：精神疾患の生物医学的知識は，スティグマ（差別・偏見）の軽減に役立つか—これからのスティグマ軽減戦略—．国立精神・神経医療研究センター，<https://www.ncnp.go.jp/topics/2019/20191122.html>（2022/9/19最終閲覧）

（2022年9月26日受付、2022年12月6日受理）

Study on diverse psychiatric nursing practicum in preparation for emergencies: Psychiatric nursing practice in FY2020 under the influence of Covid-19 and its issues

Mayumi FUJIKI¹⁾, Kenzo KAWAUCHI²⁾, Junko KURIHARA¹⁾, Mari KAZAMA¹⁾

【Abstract】

Purpose: To report on alternative training for the purpose of exploring the ideal way to conduct psychiatric nursing training in cases where on-site training is difficult and to identify issues and points to be improved in the future.

Methods: The contents of the alternative training consisted of a communication video, development of the nursing process based on case studies, a test to confirm ability, an investigation and study of social rehabilitation facilities, and a report on family experiences. For the on-site training, students visited hospitals and spent three days at a rehabilitation facility. The content of the alternative practice was adjusted by faculty members in the field of psychiatric nursing so that there would be no discrepancies between the practical goals, learning goals, and detailed items of the learning goals.

Results: Although the percentage of learning goals achieved differed between FY2019 and FY2020, there was a certain amount of learning in FY2020 as well. For Learning Objectives 1 and 2, the achievement level was higher in FY2019, and for Learning Objectives 3 and 4, it was higher in FY2020.

Conclusions:

1. There was a certain amount of learning from the alternative training in FY2020.
2. There were issues regarding the development of therapeutic interpersonal relationships, assessment, and the enhancement of nursing skills.
3. It is important to consider the use of effective learning methods according to the acceptance status of on-site training so that students can learn according to their learning goals in an emergency.

Keywords: Psychiatric Nursing Practicum, Alternative Training, Teaching Methods, Learning Goal Achievement, Diversity, COVID-19

1) Department of Nursing, Faculty of Nursing, Mejiro University

2) Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Tokyo Kasei University